

～ ヴァナッカム ～
வணக்கம்

スリランカ通信 No. 11 平成 29 年度青年海外協力隊 和田さとみ 環境教育

வணக்கம் (タミル語: ヴァナッカム=こんにちは) **எப்படி சுகம்?** (エッパディ スガム? =元氣ですか) 和田さとみです。日本は冬に差し掛かり、鍋がおいしい季節になってきたころでしょうか。私がいるスリランカ東部州バットिकाロア県は現在雨期で、バケツをひっくり返したような凄まじい雨が毎日降り続けています。日本のような堤防はないので、すぐに洪水の被害に見舞われてしまいます。連日、配属先の市役所では洪水被害の対応に追われています。私の住んでいるエリアは今のところ被害は少ないですが、いつ浸水するか分からない状況です。毎日食べるものがあり、安全な寝床があり、行きたいときにトイレに行けるということのありがたみを実感しています。



↑ 踊り子のタミルの幼児と共に

オーストラリアのボランティアさんとタイアップ企画：ビーチクリーン活動



公共の場に掲示する、「ポイ捨て禁止」呼びかけバナーも作成
 ↑ オーストラリアのボランティア：ラニさん（左）とマナーさん（右）

10月12日は、ヒन्दウー教の教育の神様サラスワディのお祭りでした。その日に私が働いている市役所で、オーストラリアボランティアの素敵なご夫婦に出逢いました。話をしてみると、この地で英語教育を推進しているボランティアさんだと分かりました。60歳過ぎのシニアボランティアさんで、生まれはインド、育ちは南アフリカ、現在の住まいはオーストラリアで、お二人とも定年退職後に第二の人生をボランティア活動に捧げていらっしゃいました。英語のボランティア活動の傍ら、近所のゴミ拾いをしている、と聞いて、一緒に活動したら社会的にも相乗効果が上がる!と考えました。そこで配属先の市役所の上司に企画書を提出し、掃除に必要な必要物品の申請を済ませ、市役所やコミュニティを巻き込んで、10月27日に、クリーンアップ活動を実施しました。この活動はバットिकाロア市役所や地元新聞社、JICA スリランカの公式 Facebook でも 11 月上旬にタミル語と英語の記事で大きく紹介されました。



↑ バットिकाロアのラグーン沿いのゴミ拾い



↑ ペットボトルやプラスチック、不法投棄が…



↑ 回収ごみは最終的にこのトラック 3 杯分に!!

ビーチクリーンの成果報告を兼ねて：不法投棄に関するミーティング

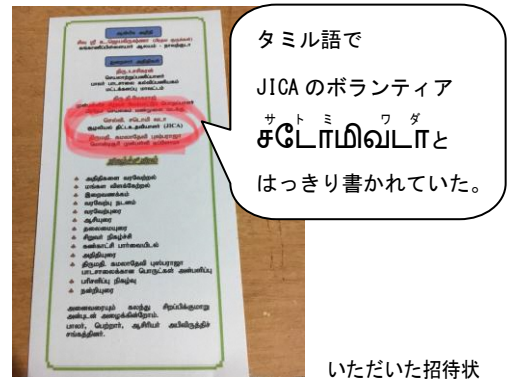
このクリーン活動ののち、活動報告を兼ねて、オーストラリアボランティアの方と共に、不法投棄に関するミーティングを市役所で実施しました。市役所の副市長やコミッションナ、保健衛生課のエリアマネージャーといった市役所内部役員に加えて、環境局、保健省や警察署の外部関係組織職員にも声をかけ、不法投棄の実態を伝えました。ここの問題は各省庁の連携がない、という点にあります。まずはそれぞれの機関で不法投棄に関わるどんな取り組みを行っているのか、現状の共有を行いました。今後この会議を拡大していく予定です。



幼稚園の先生が…

10月のある日、名前も知らない、一度も巡回に行ったことのない幼稚園から、「幼稚園の行事に来てほしい」と招待状が届きました。招待状の題目には私の名前と肩書きがタミル語ではっきり明記されていて、これは完全に来賓としての扱いです。一体どういうことだろうか…と思いつつも、その幼稚園に指定の時間に行ってみました。

すると見知らぬ先生が幼稚園の玄関先で待っていて、「バルバダックン、ミガブンナンドゥリ！（来てくれて本当にありがとう!）」と花のレイ（首かざり）をかけてくれて、大歓迎されました。一体なぜこんなに歓迎されているのか、全く理由がわからないまま、会場に入ると、幼稚園の展示会のように、幼児の作品が飾られていました。すると、ある先生が「ヴァーンガ、マダム（先生、来てください）」と言って、展示ブースに連れていかれました。そこには、廃棄物で作った教材が並べられていました。ようやく理由がそこで分かりました。9月に幼児教育の免許課程コース（環境）を担当した時に、私のセミナーを受講された先生だったと分かりました。セミナーで伝えた教材を、勤務校に持ち帰り、多くの先生方にそれを伝え、活用・実践されていました。セミナーには約70名ほどの先生方が参加していたので、先生方一人一人のお名前や所属など全く分かりませんでした。実践されていることを知り、嬉しかったです。この幼稚園は市立幼稚園ということで、パツィカロー市長や助役などの上司も来賓として参加されていましたが、園児たちが教材をどうやって使うかを一生懸命上司に説明している様子が印象深かったです。



いただいた招待状



↑ 園長先生（右）研修に参加された先生（左）



↑ 廃材使用教材（ペットボトルキャップで数字学習）



↑ お遊戯発表後、先生や園児、教材と共に記念撮影

スリランカの結婚事情

スリランカは、北海道の8割ほどしかない小さな国ですが多民族国家です。国民の6割を締めるシンハラ人、2割を締めるタミル人、1割を締めるムスリム、さらに残りの1割はバーガー人（植民地時代にスリランカに移住した男性入植者と現地人女性との子孫・ポルトガル系、オランダ系・ドイツ系などが多い）で成り立っています。民族が違えば、言語、宗教、文化、生活様式も多様なので、互いの違いを暗黙の了解で理解しながら共存しています。（しかし一部の地域では未だに民族紛争が起こっているのも事実。実際に昨年度、民族間の紛争が勃発し、国家規模で一斉にSNSが使用できなくなったことがありました。日本ではありえない、国の権力で国民の情報が操作されるという状況を初めて体験しました。そんな多民族国家のスリランカの結婚事情を紹介します。

信仰心が深いスリランカでは、同じ宗教であることが結婚の大前提条件になります。結婚は、最近はお見合い結婚よりも恋愛結婚の割合が多く、平均すると23-35歳に結婚するケースが多いです。結婚式では、どの宗教であっても妻はサリーを着ます。（※バーガー人は洋装です）まれに異民族同士の結婚も見受けられます。

民族による結婚事情（参考）同僚の聞き取り情報より

民族	シンハラ人	タミル人	ムスリム
宗教	仏教 or キリスト教	ヒンドゥ教 or キリスト教	イスラム教
嫁ぎ先	妻→夫の家族へ	夫→妻の家族へ	妻→夫の家族へ
年齢	20代前半～	20代後半～	20代前半～



↑ ヒンドゥ教の結婚式（タミル人）



↑ キリスト教の結婚式（タミル人）



↑ 仏教の結婚式（シンハラ人）

スリランカ通信 No. 12
で会いましょう!

